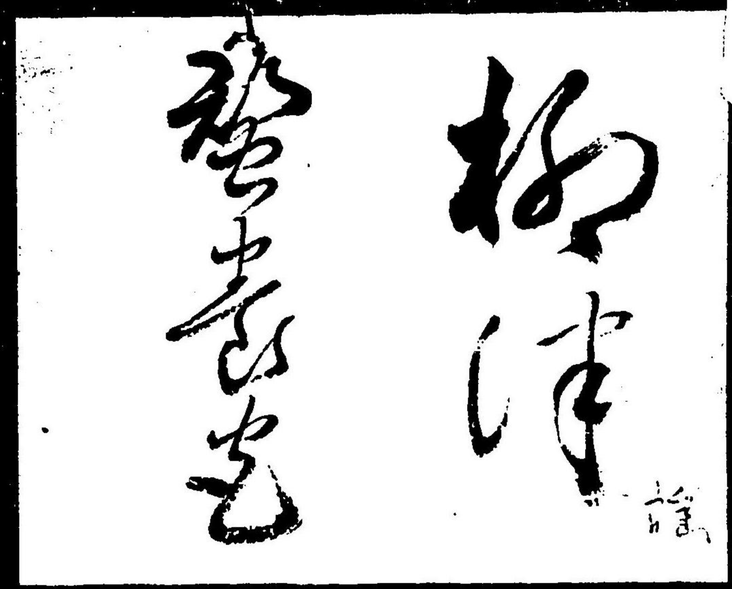
特 44
309



255
252

075079-000-8

特44-309

柳津・養蚕宮

加藤 長四郎

M42

CEL-1258

44
309

柔

柳津

願ハ乃ち東我郡柳津村ヘ捨ル

魂て呉ん　　見八仔捨ル

より初て僧ヒそ此捨し事国清

澄能源屋宣蔵豊蔵ハ常陸の

国村松大源屋宣義又陸奥倉洋

之ヘ柳津福源屋宣蔵豊蔵也

は。岡本同伯の世話及び紹介。家
が歌村重（全家治中。世子成命）
著私（意識ひひて。彼方此方を覗
仕てゐ。況し。暮し中に成ゐ。今
朝柳沼（全家らもやと思ひ
著私乃表を後ろより見なりて
前日北報。西遠の橋打渡つて

ゐ。なる。弱乃。ひなの。柳。橋。湯川
ゐて。り。狂。よ。那。名。さ。言。家。河。
言。い。撃。や。校。橋。言。久。名。よ。多。家。
川。舟。より。ふ。狂。と。弱。工。名。れ。地。荒。堂。
よ。と。ふ。し。沼。と。嘗。沼。川。の。橋。
よ。ア。渡。と。嘗。れ。家。坂。の。坂。下。の
宿。よ。見。し。が。ア。法。人。乃。橋。

藻にあらねども。宣房卿の詩に
ゆくすゑ古屋よりはんぬるさま
求めもとめ法燈国師。高僧会釈
かけまくも。塔寺墨乃紀逢青農な
ら。ぬるよ八幡の法をまもる。
居蹟きて氣毎乃宮。神あり
やしも高らかなる。七ぬり坂戦記

四月八日乃朝。
早夕ぐれの。狩ぶ。三源戦記
青り夢。柳。沖山。林。禁ある岩坂
よ早く高に。
狩よ。御ぶ。皆此。
ぬ。乃。
思ひ

此山の歩をたゝ宮ゝ窟なり
角ふ巻ちよおもしろ夕日乳城妙なる
京京ふ圭　歩人柳清八香皇世
界をかゝどり俊よも惟石巖く
やゝて弱蔵雲よ積き巌よも
原泉混ゝとして金花乃流れ
かつて曳人古蔵の苔ゝ皇社端

上言
明星石寂珠石三花乃珠樹も表く
ゆりウヤ一度も場のゝもゝて巣ハ
現世来世ゝもちちよ
畳寿福乃寂ゝ地平の後よ
ちやゝふ退天社位よるか根
しも前乃ゆし隈なき新言ハ
ゝく　平内　ふ柳津へ来りゆ

此山の歩をはこぶ。宮なり

角ふやちまおやるる名日記。城郭なる

京の京小童　出て柳清水香爐

峯をかくしとり。後ろは惟石巖と

やしてて弱蔵雲の積きに苔ふる

原泉混々として。金花乃流れ

かつて異人古蔵の苔こに。宝瓶

明星石寶殊石。三乃殊樹山美く

もりウヤ一度し塔のそとにもこの巣ハ

現世来世ともちろ。学

置手の福乃寶を。乃生の後よ

ちやくふ退天れ位ふ多ふ形

しも前乃ぷし隈ぬき。析言小

乃経巻を聞あつまる者ども如何要
なる墨人三人すなわち（シテ）ひとに義おこせ
はべるみ人ら　さんぬる此山乃者な
てひ拙法乃人乃　行くより乃法師
まてひぞ　日本乃　ひとへ乃仲勢の国より
おもてひ　ひとへ乃　尚寺乃法師乃暦書

く　法師（ソウ）　柳尚寺（シテ）
圓光寺と申ハ　延暦廿三年　植
武天皇乃御宇乃　尚寺（ワカ）　弘法
大師　入唐（ソウ）　仏法（ワカ）
流布乃為　大唐より三粒
受樹乃木　日本（ホン）乃地へ　授
粒ひとつ　三粒　絶別　南山乃松

無戸にて今に富士山に當る受
樹ハ熊野より滝ノ澤ノ関東廣
別の天竺より来る天師攻朝して
法圓修りし杉の節ハ木を反
上切て三ツ出なり木枝ハ
竹を寄せ彫物に今清澄乃屋
宮義経菩薩なり又ハ木枝

以て彫物ハ材松の竹を寄せ木ハ
何と無石ハ再ハ海中へ投令
て投入物ハ彫て日数を経て岩
別柳行へ流れ来り三度ハ柳
乃木を巻かり四當まる一七日
なり出よりを家枝七日巻ハ
中と為所謂受樹ハ栢の木也。

其時仏ごとし高らに弱人二人き
たりて来りて大師を捧
げまつる元より加持一亜阿闍梨
未なれば学問定めて劣れるべ
きなれども彼両達点れ地な
らんとて見て帰りて柳
法華経を大師乃ト

居寺に帰り来て柳をかりて中臣
氏の剛強なる宮見なる
又二人乃弱人に毋世間神祇業
現かり見て
乃結字と歌人
学生を誹謗
御代とて

中ゝ此寺此山ハ國〻靈地なるを
とゞゝ二世安樂ゝ先のこゝ人乃祈
ひゝ此山川ゝ松茅風ゝ涼しき巖ゝ
声〻松吹風ゝ
よゝ波ゝ洗ゝ國乃險を見を
て世ゝにもあるゝ
茅代殘安ゝ樂ゝ
上同

ぞ松ゝとかけ侍ゝ
乃動ゝ險世量ゝ
雖ゝ佛神ハ一切ゝ福を授け
松ゝ陽て
なゝ松ゝ柳津ゝ貴き
門跡ゝ法相宗ゝ柳津ゝ
世中ハ人ゝ代平減天

沸騰す。空海乃開闢すして、法一
師北面建立せり。其法弘
法大師、弘仁に、三宗兼修建立
せり。虚空義の等、密厳、清澄
村松柳津、是日本三虚空
蔵也。中ほど柳津ハ。
誠に異験あらせて、そこ
に

徳一大師、此地に住まれ
ぬ。護摩を修し給へハ、忽ち紫雲
たなびき、天より明星あらはれ
白鳥飛来て、新宮明神。徳一是を
祈しに、形ちを見給ふ。
長二十丈の白蛇、大
光明を放ちぬ。あらたなる海底の

見へ殺生を禁じ時刻を定て石手寺
に詣りと。宮しばゐ芝居ふ見物そと。
所分の成人より。郡書の輩
ふ。近名を名を名乗り。今八
行ものとなるもへ。
へ中に有なりやと。夕月し狂とく
強薬。華楽を奏とて。皆く

九上

月陰は清く照そよ松の実殊
へて清し新酒なり

上丙

乙女袖しぼるばかり
石屋や肉陳の斗樽とそく。
こゝ立本殺ゆ海藻あら
見へ殺生を禁じ抑見へ山

なほ。て。法を守り。國政治め。
給ふ。慧。虛空藏菩薩。
宣に。音樂を。奏。其時虛
て。花より。ぬ。天。龍。鼓。打。奏。木。白。蓮。
丹。生。明。神。龍。蓮。華。大。黑。蓮。華。
寶。頭。盧。尊。者。名。彩。し。尊。
神。佛。水。波。乃。濱。な。福。
圓。海。現。世。樂。後。生。淨。土。
生。成。守。ら。ん。と。尊。
樂。し。今。時。稱。し。信。者。感。激。
彩。ぬ。い。し。涙。腦。て。泣。ら。ん。
ぬ。ま。花。ば。蓮。し。ら。と。
か。ま。ば。ら。ば。ら。乃。
山。風。動。ぬ。波。代。元。國。帝。度。花。

第卅

稱揚奏文

しかしながら勅令を授ケ
稱揚奏文四海を治ムル人ワキマヘ抑見ハ
眺瞰天空に仕へ奉る所なり。
抑陸奥會津稱揚奏文所謂
靈神を治ル症ハ君不思議の
靈験を以て治ル延喜

武士擬宮殿の様式
をもつて仕組に出来
仕はウヤにもつて
陸奥国名所
河内国名所
ご様式の金津山
てはちご
とぶひの星に

元一二三
見るもの〳〵
文を見ては
城の妙なる
ヨ二末の大木
等の本とも
御手洗や孫
清きいとの

元一二四
思ひ組に
川の流れ
京の橋
たる文を
ボク
末ぶ〳〵
ものと思ひ
元一二五
撫川
元一二六
人の

預ひし桴ぐまぶれかふ此の我に語ふ
らん　是は此里に年経て住る
女なるが怨めし今に物しり
養ふと承りて除ぞ尊き浮世に我
渡る影を見て始め語りきて弟のあり
和らぐわざの種ら此よあれば
求る人にかけ海くし　語ふ宿ハ

まよら京れし女御に數て出堂
又然く妹出我語ふらん外よ影
答しあらは疑ひでばひ一節よ詠ら
悔しく　いろに見ぬ女性よ
殊中でさる里れ、や、是ハ都
より勅使まで渡り侍、掬し
猶も何の為に御下向まで

ひそ（ワキ）さんじゐ兵今年新年
案内俊ゑあらびの君は狂ふ品
俊乃言葉の次第あるべき
延喜式ゑ撰定し殺ぶきてため
準ずるべき同勅使ゑ宣旨
てひ（ツテ）貴殿や君をしてべに
消息殺人殺ぶ殺ぶ

別と小蝶（ツ）ゑ拉ひ（ツ）かゑ（ツ）ら後
きゑ月ゆ仏ゑ（ツ）ゑ君乃言葉ゑあり
かゑ（ツ）や（ワキ）いゑ（ツ）ゑ中ひ。梅見成二
本ゆ大本ハ伊本ゑてひぞ（ツテ）さ
人ひ神本乃槻ゑ殺ひゑ言葉
十案書案園二史案ゆ見成
八書養村ゆ仏川ハ孫拉川

西の流れ、墻内河に行れ居る
古江まで（平）来て古江と入へて
は。掛こ番しく和泉守殿いら
ずる人やらん（ニテ）見へ此河邊より
仕へ申者まで（平）あら高橋や
対に出る若き女性乃清水と
て。仕へ申ぬ出る来る（ニテ）あら

悪る所ぬ出るや和泉社とゞめ
腰掛神と言伝へ申して（平）
さんゞ唯奉幣参詣神を社存
じてはへ（ニテ）あら何者ぞや此お
ゞひ大明神。天照太神乃御妹に
してゞらこむすひ申なり。
さる程に（ニ）倉稲（ウカノ）

魔乃面拡ちを、問ひ、立居り
敬ひ、居り。能く養し給へよ
得れば、男八、
て養ふべし、子更今八、長末
立　栗掘り、置女子ぞ。
神に捨て賜ふ。塵も変る神無
乃道も強て、神ならぬ身也

誰とても、ならぬ居ぬる難や
行く稲荷養田明神乃得れ
給ふ通ぬ　此養養
天明神乃天照大神乃御妹成
しぬ神養れ給へとて男
女夫婦の縁やうんと拾人おハ
しぬ稚立霊乃号を申事也

[illegible]神社とも[illegible]千早振神
代乃昔よりの世系を伝へし記な
れば[illegible]村とも中古[illegible]又
[illegible]後醍醐天皇[illegible]に至て
伝へかしを[illegible]とりつゝ治へ[illegible]
枝葉の[illegible]に楠安二
[illegible]苔は国[illegible]伝へ乃
[illegible]ひ乃業を学ぶ。
楠木氏楠[illegible]本姓[illegible]を[illegible]
[illegible]して春[illegible]降て楽のあ[illegible]
[illegible]氏侍て疾よりし[illegible]
[illegible]にしたゞ[illegible]
[illegible]に[illegible]て[illegible]
世乃[illegible]の[illegible]

弥太郎は舟をこぎ出すと、ながうばの乃海ぶしをたてゝ海面を
ずつと引き抜きまゝ稚子ヶ嶽の方へ
能元戸とらて行
くゝ蝶とかすゞ生よりしを
懐乃女男我合をてむつび法厚
祇を付て稚子ヶ嶽の夜深し紀貫之の

今ゝ冬ゝもなりれば寒中にて水よ
氷りて如何ゝ
色ゝ変ゝ
このゝ海面も開きゝ青苔
ゝ隠奥ゝ今津あゝ養老
星に逆ゝと竜
女ゝを教へて

たゝちれの親れかゝ
海面を開きゝ青苔
ゝ養老
ゝ七姫乃孫我弦ゝ
ゝ乃ゝ

つ仏んと拾ひて、ある社今はそれ
人の形もしるかりき。頼ひを叶
へ給ふ事
実や郭公ひとこゑ
しぐ〳〵
浦の根ぶ成ぶ
語り給ふ
今は行末とうたへ
種産霊系強て
実を信ぞかし

北上

不思議や物ぞ沙弗の
郭公又二ぶ沙弗
倉稲魂
大同巳賣
五穀
楽して勅使を
尖く神示
巻して
に仕へ
滑し
成

隠れ松風は、音も静かに響き
渡りて、神示の曲歌、祭典の
侍頭の家柄、後三字上
や賢紀淑、代代の弱しとて、四方
浮き民の為、数の多き歌、宅地
下に業を楽しみ、老ての者
帝我家、天子の衰弱の御

家、業績をのこしたる第民の
為のことを考へ、高砂の
陸の山の端、幽かなる光に歌
もれ人、地上
ふ思俊や、吳香業に
くれ沢の神、明かる神前の
若き庭燎をあげて何を祈る

上地

長

靜

神樂奏して、華張り、阿波、

上地

永仁丁卯、於武蔵国、

阿波熊志

神系図曲七度宣旨、

明神

妙成法師をあげて、

少弐

威儀張り、

勅使を蔑如奉張り、勅使八威

儀を整ひ、

法師中て帰らんと

思ひ、

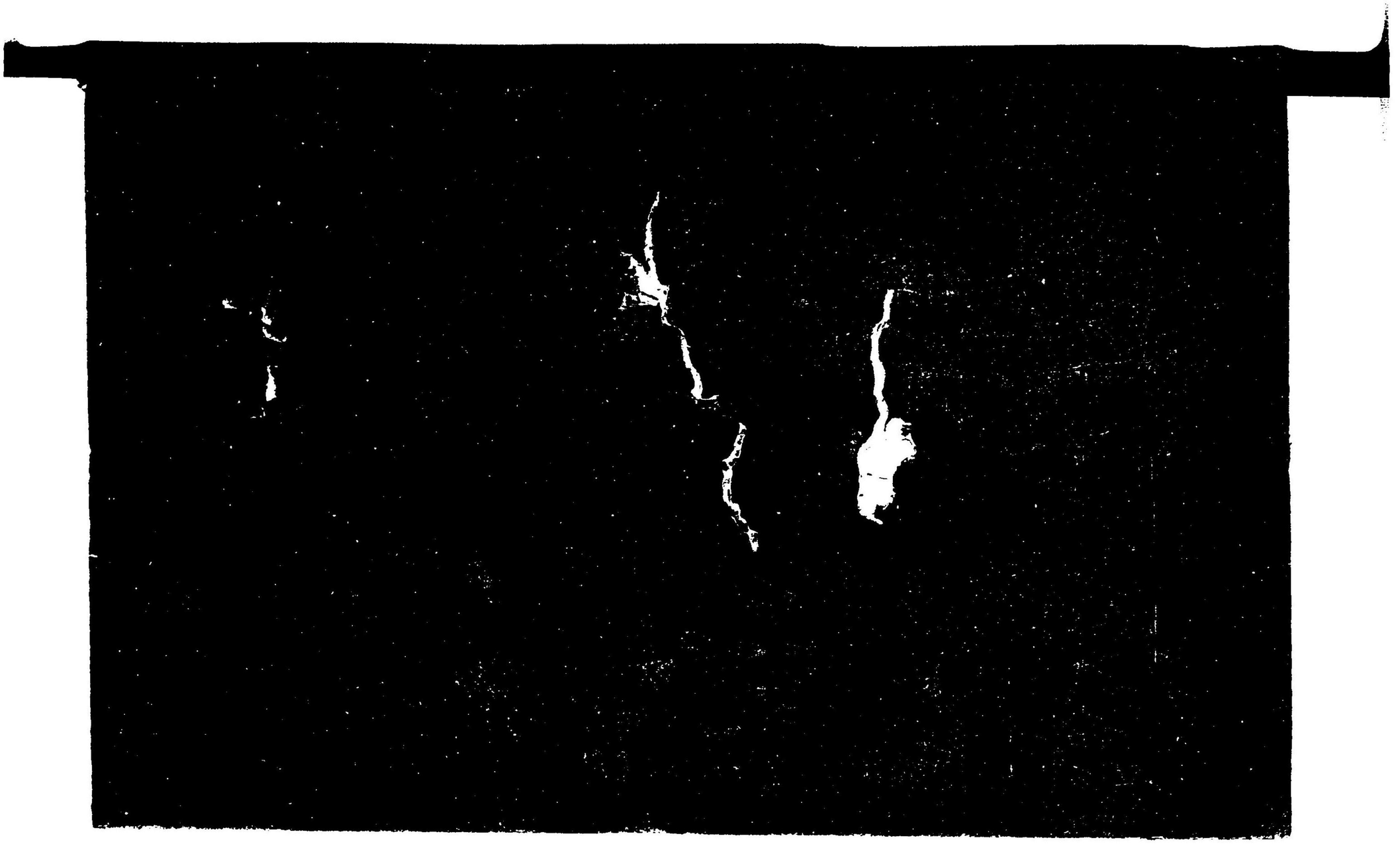
出れば、

早篠乃目も高らく、

もも志れ、

神はあらせ張り、

255
252

此謡曲原本ハ文化文政の頃森与三郎命教翁乃著作にして有名なる物なりしかども年を経るに随ひ世に稀なる程なりぬ予翁外孫の縁あれば世永存ならんを惜み再刻発行為す事なり

明治四十二年四月　御届
同　年五月　發行
著者兼発行者　加藤長四郎
福島縣若松市
馬場上一之町六番地